

## 『ひろしまのピカ』が海を渡ったとき

日本の絵本の翻訳出版に携わって

平成 22 年 3 月 6 日

講師：栗田明子

### はじめに

皆さんこんにちは。栗田明子でございます。皆さんにレジュメをお渡ししてあるのだそうですが、実は私、今「頭の中が真っ白」という表現がありますが、「頭の中が真っ黒」です。お話ししたいことが一杯詰まって、真っ黒になってしまいました。黒柳徹子さんのようにお話しできればよいのですが、それもできませんので、多少順序を変えたりします。御了承ください。

### 絵本の世界へ

私は 1975 年に初めてボローニャの国際児童図書展にまいりました。それを自分では私の絵本元年だと思っています。それまで私は日本ユニエージェンシーという会社で海外の本を日本に紹介する仕事を主にしていました。しかも大人の本で国際的な共同出版に携わっておりました。大きなプロジェクトがやっと 5 年がかりでめどがついたところで、さて 2 週間の休暇を取ろうと思ったわけです。それがレオナルド・ダ・ヴィンチに関連のあるプロジェクトだったので、ヴィンチ村に行きたくて、2 週間の休暇を取りました。それが 4 月の初めでした。そのタイミングで、ボローニャで国際児童図書展があるということを知りましたので、それでは寄ってみようかしらという軽い気持ちで寄りました。

そのときにちょうどボローニャにいらっし

やることになっていたほるぷ出版と偕成社の社長から、通訳をしてほしいという御依頼を受けたものですから、午前中は偕成社、午後はほるぷ出版、ということでお引き受けしました。ほるぷ出版では、たまたま年齢別に「こりすコース」とか「うさぎコース」とか六つくらいのコースを作って、約 20 冊をセットにして訪問販売をするという大きな企画を立てられていました。ですから、海外の本は欧米の本だけではなくて途上国の本とかいろいろと権利を取るということで、皆さん一生懸命でした。ほるぷ出版の活動が始まったことでほかの出版社の方も刺激を受けて、それから日本人たちが海外の本に目を向けるようになったと思います。私自身も書店に行っても児童書のコーナーに立ち寄ることが余りなかったものですから、全く白紙の状態でもまいりました。でも 2 社の通訳をさせていただいたお陰で、絵本を見る目が養われたといえますか、非常に興味を持って見ることができ、感謝しております。

### ボローニャ国際児童図書展の特徴

#### 1. 絵本作家の登壇

ボローニャの図書展というのは、いらしたことがある方がたくさんいらっしゃると思うのですが、ほかの図書展と比べて三つ特徴があると私は思っております。

一つ目は、絵本画家を目指している若い人

たちにとっての登竜門であるということです。会場に入ると、まず、絵の展示場があります。それは自発的に応募するのですが、そこで選ばれた作品がその展示場で名前も一緒に飾られますので、目を付けた方に直接コンタクトすることができます。絵本の画家たちにとっては非常によい刺激にもなりますし、自分自身をアピールする場所でもあります。

ボローニャ国際児童図書展の特徴

## 2. 交流と情報交換

二つ目は、ほかの図書展と一番違うところですが、翻訳権の売買のビジネスの話だけではなくて、編集者はもちろんのこと、図書館員、学校の先生、翻訳者、絵本画家と作家など、同じ志を持った人たちがみんなそこに集まってきます。ですから自然に交流の場所になりますし、情報交換もなされますので、ほかのビジネスだけの図書展とは非常に違うという特徴を持っていると思います。

## 日本の絵本を出展するまで

私が最初に行った 1975 年は、パビリオンが二つしかありませんでした。イギリス中心のパビリオンとその他の国のパビリオンで、アメリカでさえもスタンドが一つでお留守番のような男性が一人いて、編集長たちの影も見えませんでした。日本は 5 社くらいが出ていました。福音館書店、至光社、学研、偕成社、フレーベル館だったかと思います。今はもう 10 社以上が出展していると思いますが、当時はそのくらいでした。

私はそのときにヒントを得ました。それまで私は日本の心を輸出するためには、日本の文芸書を出さなければいけないということば

かり頭にあったのですが、それを見て「ああ、絵本ならば、編集長たちが絵の質を見て判断できるし、翻訳テキストの分量も文芸書に比べたらかなり少なく、もう少し簡単にできるのだから、日本の絵本をここでもっとプロモートすることはできないだろうか」と思いました。それで翌年（1976 年）から日本の共同スタンドを持ちました。一社ではスタンドを持ってないけれども、10 冊までなら、5 冊までなら、あるいは 1 冊でも出せる、そういうふうに思って皆さんにお声をかけました。それで、日本ユニエージェンシーの看板で出展しました。

1976 年は、ほるぷ出版がおはなしキャラバンと協力をしていらして、そこで、おはなしキャラバンの実演をしたいというお申し出がありました。2、3 人の方が見えて絵を見せながら順番にいろいろなお話をそこで演じてくださいました。集客力はかなりあり、たくさんの方が見てくださいました。中にはアフリカ系の方が自分の描いた絵を持ってきて、そこで民話を素材にした絵を見せながら実演をしてくださったり、そういう飛び入りもあつたりして、大変面白い図書展になりました。

ところが日本から集まった本は民話を素材にしたものが多かったのもので、大きな判型であったり、ページ数が多かったり、しかも縦書きで右開き、そういうハンディキャップがありました。それを見た編集者に、これは何ページなんて言われても、私は 1、2、3 とその場で数えるような無様なことをしていました。フィルム代なんて言われてもキョトンとしているわけですね。技術的なことを全く知らなくて、4 色に分解したフィルムの複版を提供して、それで本が作られるというようなこと

すらも私は知らなかったのです。

## 初めての成約

それでも 1 年目に成約した本があります。それが『チロヌップのきつね』（たかはしひろゆき文・絵、金の星社、1972 年）です。御存じだと思いますが、高橋宏幸さんという方がお書きになった絵本で、中は 4 色使っているのですが、非常に地味な、どちらかと言うとハッピーエンドでない、ちょっと悲しいお話です。ハッピーエンドでないとなかなか難しいと言われましたが、アメリカの小さな出版社で Windmill Press というところが出版してくれて、私にとっては記念すべき絵本になりました。ところが、テキストにお兄さん狐は男の子らしく活発で、妹狐は甘えん坊でというような表現があったら、それは男女差別になるから困る、変えたいという申し出がありました。当時アメリカではフェミニスト運動が盛んであったということもあると思うのですが、そういう要求があるとは予想もしていませんでした。意外な反応でした。

今スクリーンに映写しているのは『チロヌップのきつね』の最後の方の場面です。赤が非常に象徴的なのです。それまではずっと、単調なグレーを基調にした地味な絵本なのですが、赤は女の子の狐が首にしていたリボンの色なのです。わなにかかってしまって、それも戦争の影響があるものですから、著者としては、戦争はいけない、平和が大事だということを訴えたい気持ちがあって、こういうお話を作られたと思います。これが非常に編集者の心を打ったのだと思いますが、Windmill Press の編集長がこれをやりたいと言ってくれました。何年か後にドイツの小

さい出版社から出ましたが、そのときは男女の問題もなく普通に翻訳されて出されました。

## 日本の絵本作家への高い評価

日本の絵本が非常に海外で受けにくい理由をちょっとお話ししましたが、1976 年の最初のブックフェアの経験をお話するために日本の編集者の皆さんにお集まりいただいて、なるべく左開きで横書きの本を作ってくださいということをお話ししました。年齢に応じてページ数も制限するしサイズについても考えてくださいと、フィルム代も高くなるように白抜きをなるべくなくしてくださいとお願いしました。それから編集者の方も絵本作家の方たちもボローニャに行かれるようになりましたので、御自分たちでもいろいろ学習して下さったと思います。ですから今のように「両面通行」になるまでには時間がかかりましたが、日本の作家が非常に評価されるようになってきました。当時も、例えば赤羽末吉さんや安野光雅さんが国際アンデルセン賞を受けられ、瀬川康男さんは推薦だったかと思いますが、日本の絵本がボローニャでも賞を取るようになりました。

### ボローニャ国際児童図書展の特徴

## 3. エルバ賞、グラフィック賞

先ほど、ボローニャ国際児童図書展の三つ目の特徴として、賞の話を忘れたように思います。当時エルバ賞とグラフィック賞というのがありました。エルバ賞というのは、ボローニャの 10 歳前後の 10 人の子どもたちによって選ばれる絵本です。グラフィック賞というのは、低学年と高学年に分かれて、全体のデザインもそうですが、文字や絵の完成度と

いった審査基準があり、専門家が選びました。

日本の作品で印象に残っているのは、米倉斉加年さんの『多毛留（たける）』（米倉斉加年文・絵、偕成社、1976年）という絵本です。これはテーマが日本の浜辺に住んでいる男性と小さな舟で流れ着いた朝鮮の女性との話なので内容的に非常に難しく、そのために海外版はまだ売れていないのですが、その全体的な美しさが非常に評価されました。米倉さん御夫妻もボローニャに来られて偕成社がパーティーを開いたりして、喜ばれました。こういうふうにグラフィック賞のほかにエルバ賞を取った方もおられますし、日本の絵本が評価されるきっかけになったと思います。

## 転機

私が日本ユニエージェンシーにいる数年の間に海外からの絵本を500点くらい契約しました。いわば著作権の輸入をしたわけです。ある日私は日本の書店に行き、児童書のコーナーが大変広がって、自分が紹介した本がたくさん並んでいるのを見ました。それは一見嬉しいことのようにですが、ひょっとしたら私はその輸入した本を競争させているのではないかと思うようになりました。もっと日本の本を輸出することに時間を取りたい、そのためには独立するしかないだろうと思えてきたわけです。

文芸書では翻訳に時間がかかるし、適した翻訳者を探すのもいろいろな壁が厚く大変だということが分かっていました。図書展で30分おきのアポイントだけで、海外の本も扱い、日本の本も売るということが物理的に不可能だと思えてきたので、独立したいと社長に申し入れました。そうしましたら、それはよか

ろう、ただ、個人ではなくて会社組織にしないと言われました。なぜかと言いますと、やがて日本の国の援助が必要なきが来るかもしれないので、そのためにはマイナスでもよいから実績を残さない、会社組織にしないと言われました。ところが私はもう既にケルンに行くということを決めていたものですから、さあ大変。個人ならどこかの出版社のスカウト的な仕事をして生活できると思っていたのですが、会社組織となるとそうはいきません。事務所も要るし、第一にパートナーが必要になります。そのころ福音館書店にいらっしやった、今日も来てくださっているのですが、板東悠美子さんにお声をかけて、パートナーになっていただくことにしました。それで快諾を得まして、女二人でとにかく船出をいたしました。それが1981年のことです。

## 日本に対するイメージ

日本の本が受け入れられるための努力を皆さんして下さったので、「両面通行」になりかけていたのですが、海外で日本がどういふふうを受けているかということをまざまざと見せ付けられたことがありますので、その見本をお見せしたいと思います。これは児童書ではなくて『キッチン』（吉本ばなな著、福武書店、1988年）のイギリス版ですが、なぜか表紙の絵が舞妓さんのうなじになっています。これはもう80年代に入ってから話なのですが、その時点でも日本のイメージというのはその程度なのです。

それからイギリスにはパッケージャーといういわゆる企画制作の会社がありますが、大抵シリーズを組みます。そのときに見せられ

たこれは「日本を知ろう」というテーマの本で、これ御覧になって分かるかしら、富士山なのですね。そこまでは許せるとしても、この男の子の格好が私にはモンゴル人にしか見えないのです。それも私の偏見かもしれませんが、アジアといっても海外では一括りで、私たちがヨーロッパといっても国の区別ができないのと同じように、あちらの人たちもあれが日本人だと思ってしまうのですね。これはやはりこまめに日本の本当の姿を私が知らしめる努力をしなければいけないと感じました。

### 海外の編集者たちとの出会い

また少し時代が戻りまして、ボローニャでいろいろな方にお目にかかったお話をしたいと思います。1976年にイギリスのボードリー・ヘッド (Bodley Head) というところのスタンドに寄りましたら、アメリカの編集者でアン・ベネデューズさんという方にばったりお会いしました。エリック・カールさんとかターシャ・テューダーさんとか、日本からは中谷千代子さん、安野光雅さんの本などを編集なさって今もコンサルタントで活躍している方です。そこでボードリー・ヘッドの編集長のジュディー・テイラーさんに紹介していただいて、それでベッティナ・ヒューリマンさんもいらしていました。皆さんお名前を御存じだと思いますが、ちょうどその年に *Seven houses – my life with books* (邦訳『七つの屋根の下で：ある絵本作りの人生』ベッティナ・ヒューリマン著、宇沢浩子訳、日本エディタースクール出版部、1981年) という本がドイツ語から英語に訳されて出版されたので、そのためにそこにいらしたわけです。

それから福音館書店から出張でいらしていた板東悠美子さんともそこでお会いしたと思います。

皆さん共通の話題で盛り上がりたりしました。安野光雅さんの本が特にそのときは話題になりまして、夜のパーティーなどでもいろいろな出版社の方、評論家の方たちにも紹介していただきました。そのことが私にとっては非常によいチャンスになりました。翌年からボローニャに行く前にヒューリマンさんのお宅に板東さんに連れて行っていただいているいろいろなお話をうかがったり本を見せていただいたりして、それが私にとっては大変よい刺激になりました。

### 海外への売り込み

どういうふうにして本を海外に売り込むかというお話をしたいと思います。『壺の中』(安野雅一郎作、安野光雅絵、童話屋、1982年)の話をまずしましょう。これは確か安野さんのさんすうのシリーズの2冊目だと思います。算数がお得意で、エッシャーみたいな逆さ絵本みたいな本もお描きになっていますが、位相幾何学的な発想もなさいます。

一つの壺がありました、その壺の中に大きな海がありました。海の中に一つの島がありました。島の中に二つの国がありました。一つの国に村が三つありました。段々四つ五つと増えていくわけです。最後にまたカップボードの中に壺が入っているのですが、それは難しい言葉で言うと階乗と言うのだそうですね。数学用語だそうです。それを易しく子どもたちに語りたいというのが安野さんの主旨で、もうその話を聞いているうちに、あの小さい島が壺で一杯になるというふうに想像

してもらえれば安野さんの目的は達したわけ  
です。それを後ろの方で小さいドットを使っ  
て説明していらっしゃいます。初めは小さい  
点が、段々ページをはみ出るぐらい多くなる、  
それを易しく説明しています。そういうプレ  
ゼンテーションを安野さんの各国のファンの  
編集者の前でしましたら皆さん喜んで、すぐ  
に何か国がその場で決まりました。確かシン  
ガポールで印刷したと思います。

その次に出た『魔法使いの ABC』（安野光  
雅、安野雅一郎著、童話屋、1980 年）のお話  
をします。ゆがんだ物を描いておいて、鏡な  
りアルミホイルなりに投影すると正常の姿に  
なるという、英語では「アナモルフォーシス」  
（ゆがみ絵）と言うのですが、それを皆さん、  
（アンノさんをもじって）「ああ、アノモルフ  
ォーシスだ」と言って喜んでくださいました。

これを作るにも、例えば大文字はエンジェ  
ルから始まっています。エンジェルと言っ  
ても、日本では白い羽が生えたようなの  
がエンジェルですが、海外では決してそうで  
はないというようなことですか、いろいろ  
皆さんが意見を言うてくださるのですね。真  
ん中に植物が描いてある。これはアップルな  
ので問題ありませんが、「この植物はこっちは  
ないわ」というような意見がいろいろ出た  
りしました。事前に一応アメリカとイギリス  
の編集者にはこういう案だということをお見  
せして間違いのないようにしました。例えば  
本の表からは大文字、裏からは逆さまにした  
小文字で、例えばアリクイ、英語ではアント  
イーター（anteater）でしたっけ、とにかく  
全部 A から始まる。で、真ん中に来たらやり  
方が書いてあります。子どもたちが本当に興  
味を持ってやるということで、オランダの編

集者が大喜びだったのですが、第二言語が英  
語のドイツとかフランスも出してくれるかと  
思ったら、意外とそれが駄目で、結局はアメ  
リカとイギリスと日本と 3 か国だけというこ  
とになりました。これは確か日本で 3 か国の  
全部を刷ったと思います。

そういうふうにして一応この作家のものだ  
ったらこの編集者の出版社、と決まってくる  
のですが、そうではなく、ふらりとスタンド  
に立ち寄って自分たちから発見してくれる編  
集者ももちろんいて、それが図書館展の面白い  
ところだと思います。

### 挿絵に見る文化の違い

もちろん、絵本が海外で出版されることが  
私たちの目的ではあるのですが、先ほど言  
いましたように、日本の文化を正しく伝える役  
目もあると思うのです。しかし、いろいろな、  
思ってもみなかったような問題にぶつかるこ  
とがありますので、文化の違いということ  
でお話ししたいと思います。

オランダで『はれときどきぶた』（矢玉四郎  
作・絵、岩崎書店、1980 年）を出したいが、  
絵だけは自分の国の画家を使いたいという話  
がありましたので、よかろうということでや  
ったのですが、これを見てください。オラン  
ダの人の日本のイメージというのはこういう  
ことなのですね。御飯を盛った上に鉛筆を突  
き立てたり、障子の前でお母さんが着物を着  
てエプロンをつけて高下駄を履いてろくろ首  
だったり、どういうことなのでしょうね。も  
う唾然としてしまいました。これはエージェ  
ントとしての失敗談なのですが、やはり描い  
たものを一度見せてもらうべきだったと思  
います。

それから『じろはったん』（森はな作、梶山俊夫画、アリス館、1973年）という絵本のときは、梶山俊夫さんの絵をほかの絵にしたいという同じような要望がありました。これはアメリカ版で、トーテムポールの前に子どもがいます。中国人とも日本人とも分からないような服装をしたおじいさんが、筆を何かこういうふうを持っている。これもチェックできていなかった、こちらから要望しなかった、ということです。ただオランダ版の方は、こちらで作家の森はなさんをお願いして日本の村の写真とか、そういうものを提供することによって、日本に近いような絵のものを作ってくれたと思います。日の丸まで持っていますけれどね。

### 文化の違いによる描き換え

いわむらかずおさんの『ねずみのさかなつり』（山下明生作、いわむらかずお絵、ひさかたチャイルド、1986年）という本があるのですが、イギリス人は、見たとたん「あ、これは駄目、動物愛護協会に怒られる」と言い、まったく予想していなかった反応でした。たまたまカナダの編集者も来ていたのですが、カナダでは大丈夫と言いました。カナダだけではマーケットが狭いということで成約にならなかったのですが、フランスでは問題なく出ました。

同じいわむらさんの作品で『ねずみのいもほり』（山下明生作、岩村和朗絵、ひさかたチャイルド、1984年）という、みんなが協力して苦勞して芋を掘って、長いのを持ち帰る秋のお話があります。ドイツ人がそれを見て「こんな芋はドイツにないから駄目だ」と言ったのです。でもフランス人は「お化け芋でいい

のだから」と言って、フランス語で出してくれました。

このシリーズのねずみの名前は、日本では「いっちゃん」とか「ふうちゃん」とか「さんちゃん」とか、そういう番号のようなものが付けられていたと思いますが、それをフランスでは日本のミリタリズムかと言うのです。それでピエールとかバンジャマンとか、そういうフランスでポピュラーな名前を勝手に付けてしまいました。日本では『ぞうのババール』が『ぞうのたろう』になったりはしないのですけれどもね。向こうではやはり自分たちに受け入れられるようなものを作ることが自然になされていることを知りました。

それから『プータンなんになりたいの』（ならさかともこえ、わだよしおみぶん、JULA出版局、1984年）という絵本があるのですが、日本語版では野球のシーンがあります。こぶたくんたちが野球をして遊ぶのですが、イギリスの出版社が、野球は全然ポピュラーでないからサッカーに描き換えてくれと言うのです。これも画家の方をお願いして、画料を無料で描き換えていただきました。

あと、黒人が消えたお話をします。市川里美さんの『お星さまのいるところ』（市川里美作、偕成社、1988年）という本なのですが、真ん中の黒ん坊のお人形がアメリカ版では消えてしまっています。市川里美さんが集めた人形のスケッチであるにも関わらず、こういうカリカチュアというのはやっぱり困るということで消してしまったのですね。

逆の場合もあります。それは日本版で男の子が化学実験をしている絵本ですが、それが出来てきましたらプエルトリコ人のような人種の子に変わってしまいました。これが出た

ころ PC という言葉が盛んに言われました。パソコンの話ではなくポリティカリー・コレクトネス (politically correctness; PC) という言い方で、多民族が集まっているから単一民族の絵では困るということで描き換えてきました。そんなことで、文化の違いで思ってもみない反応がありました。

編集者の好みということもあります。今度は安野さんの『いないいないばあのえほん』(安野光雅作、童話屋、1987年)についてお話しします。これはシンガポールの印刷所で製作したものです。日本語版はお母さんの表紙です。アメリカ版では赤ちゃんの絵になりました。それからドイツ語版ではピエロになりました。そういうふうに、うちの国ではこれがよいということで、編集者の好みでもあると思うのですが、それぞれに表紙を変えてきました。

後半に『ひろしまのピカ』(丸木俊え・文、小峰書店、1980年)のお話をしたいと思います。今さっとお見せしたものをここに置いておきますので、どうぞ休憩の時間に御覧になってください。

## 海を渡った絵本の件数

今までやってきたことの一部をお話ししましたが、皆さんはどのくらいの絵本が日本から出ていると思っていらっしゃるでしょうか。クイズではありませんが、足掛け約 30 年の間に私どもの会社で扱った絵本が約 5,000 作品になります。その中の約 90% はアジアです。私にとって思いがけなかったことは、アジアの著作権地図が書き換えられたということです。1987年に韓国が万国著作権条約に入りました。それまでは著作権料を払わなくて、も

ちろん契約もなしで自由に本を出せていましたが、それ以降は契約して著作権料を払って出版しなければならなくなりました。それからは韓国の人たちは競争して日本の本を翻訳するようになりました。最初はいわゆるビジネス書とか啓蒙書とかの一般書というかノンフィクションが多かったのですが、段々絵本などの権利も取るようになってきました。韓国のお話をしているとまた長くなってしまいますので、時間があれば韓国に戻りたいと思います。

## 『ひろしまのピカ』のアメリカ版が出るまで

それでは本題の『ひろしまのピカ』のお話をいたします。最初はアメリカで出ました。アメリカで出る際も、私の記憶では自発的に翻訳をしてくださった方がいて、それをお持ち込みになったものを基本的にアメリカの出版社に見せていたのですが、「そんなのとても駄目ですよ」と図書館で言われました。「アメリカは加害者なのだから、私たちはそんなの出せるわけがない」と言われました。

ニューヨークに行ったときに Pantheon (パンセオン) の編集長のパトリア・ロスさんという方にお会いしました。彼女は本を読んで「こんなにむごい話をこんなに美しく昇華させた本はない。本当は私の手を出したいのだが、会社の営業部で反対されてしまった。残念ながら出せないけれども、これを出せるかもしれない編集者を紹介する」と言い、紹介してくださったのが、William Morrow and Company (ウィリアム・モロー) という大きい出版社の傘下にある Lothrop, Lee & Shepherd Books (ロスロップ・リー・アンド・

シェパード) という小さな出版社でした。ドロシー・ブライリーさんという、私と同年代でボローニャでは時々お目にかかっている、ショートヘアーできりっとした印象の方でしたが、その方にお会いして、パトリスia・ロスさんからの紹介でもあるし、是非、と言ったらほとんど即座に決めてくださいました。やはり営業の人たちを説得するのに大変だったと話してくださいましたが、これは出すべき本ですと言って最初に出してくださいました。

### 数々の賞を受賞

それで 2、3 年したときに、Mildred L. Batchelder Award (ミルドレッド・L. バチェルダ賞) という、1 年間アメリカの中で翻訳出版された本の中でベストの本に与えられる賞を受けました。そのバチェルダさん自身も「私の名前でこういう本に賞を出してよいのかしら」という疑問を持たれたようです。しかし、それもドロシー・ブライリーさんが説得して賞を受けました。そのほかに Jane Addams Children's Book Award (ジェーンアダムズ平和ブック賞) という、1930 年にノーベル平和賞を受けた方の名前を冠した平和賞を受けています。それから Boston Globe-Horn Book Award (ボストングローブ・ホーンブック賞) をとりまして、これも非常に高い水準の本に与えられる賞です。それから American Library Association Notable Book (アメリカ図書館協会の推薦図書) にも選ばれ、四つの大きな賞を受けました。日本でも絵本につぼん賞の「絵本につぼん大賞」を受けていますが、大変よい賞を与えられたと思います。

### 各国を行脚

図書展の展示棚に飾っているだけではいけなくて、これはやはり出版社を訪問しなくてはならないと思いましたので、行脚をいたしました。そのときには私は独立して、先ほど申したとおり、有限会社栗田・板東事務所というのを設立していましたので、ケルンに本拠を置いて、ケルンを中心に本を持って行商いたしました。

### フランス

まずフランスです。当時、緑の党とかオルタネイト (alternate) とかドイツなどでも草の根の運動が起こっていたのですが、本当に数人でやっている Syros という小さい出版社でやってくれることになりました。

### オランダ

それからオランダに行きました。Gottmer と書いて喉の奥の方でホットマーと言う出版社に行くことにしました。ユトレヒトまで車で行って、それからバスでハーレムというところに行き、ハーレムに行けばそこにある唯一の出版社だから、だれでも知っていると思ってしまったのですね。それでバスに乗って、運転手さんにハーレムで降りたいと言ったら、ハーレムでも三つ停留所があるが、どこなのだと聞かれました。分からなかったのとにかく真ん中ならどこでもよいだろうと思って真ん中で降りました。そうしたらだれもいなくて、遠くに建物が見えたので行ったら病院だったのです。それで病院の人にホットマーという出版社に行きたいと言ったら、そんなの知らない、と言われてしまいました。仕方なく電話を借りて車で迎えに来てもら

い、10分くらい乗ったら、海辺の近くの林の中に建物があり、1階が印刷所で2階が出版社というところでした。会ったのは私と同年のヘンス・ホットマーという女性社長でした。彼女が日本大好きだということを私は知っていました。四国のお遍路さんをやって、何年かかかって88か所回ったそうです。それで当然広島のことも知っているのです、見せましたら「今は、オランダではなかなかこういう4色のよい絵本が売れなくなってしまったのよ」と言われました。私が1975年に行ったところには、オランダではよい絵本がたくさん出ていたのですが、時代の趨勢といいますか、段々下火になって、オランダでは余り絵本が売れなくなっていました。安野さんの本を出している大きい出版社も、安野さんの本でさえもうやれないみたいな、そういう時代になっていました。

#### スウェーデン、デンマーク、ノルウェー

あきらめて次はスウェーデンに行きました。Rabenという、協同組合の傘下にある出版社の編集長が、ほとんど即座にかなりの部数を決めてくれました。

デンマークとノルウェーは、Hjuletという出版社で、ほとんどワンマンオペレーションなのですが、Syrosのようにやはり草の根運動をやっているところで、部数は多くなかったのですが、2か国で出してくれることになりました。

北欧からケルンに戻ると、オランダのホットマーさんから手紙が着いていて「忘れられない本なので本を送ってください」とあり、感激しました。そうして、結局出版を決めてくれました。

#### ドイツ、オーストリア

問題はドイツです。ドイツではいろいろな大きい出版社に見せたのですが、駄目でした。例えば、血を流しているつばめが歩いている場面がありますよね。それを見ただけで、プレゼントをしようと思っていたおばあさんなり、お母さんなりが、買ってくれないと言うのです。子どもが絵本を買うわけではなくて、おばあさんやお母さんが買う。つばめがちょっと血を出しているだけでも難しいと言われました。

グーテンベルク博物館の館長に相談に行き、いろいろなところに見せたけれど駄目なので、と言いましたら「ベッティナー・ヒューリマンが生きていたらすぐにでもやるのだけでもね」と言われました。スイスではドイツ語の絵本を出していましたが、結局、最終的にオーストリアのウィーンに行ったときに、その郊外にあるキリスト教関係のザンクト・ガブリエル (St. Gabriel) という出版社が出してくれました。そのひょろ長い男性の編集者とは時々ボローニャで会っていたぐらいだったのですが、快く迎えてくれ、出してくれました。

#### スペイン

スペインでは、マドリードの図書展に展示して Minon という出版社が興味を持ちましたが、あちらは英語ができない、私はスペイン語ができないので、言葉がちゃんと通じません。それで日本大使館のスペイン人に通訳をお願いしました。すると、やりたいのだけど自分たちが持っている双書シリーズにサイズが合わない自分たちは共同出版には参加しない。でも、フィルムを買ってやります、と言われました。1国で出すというのはとて

も大変なことなのです。

ちょっと共同出版のお話をしかけましたが、ヨーロッパでは2,000とか3,000という単位で出版しますから、共同で何か国か集まって、1万とか2万に達したときに初めて印刷するというやり方が当たり前でした。初期費用節約のためです。それでアメリカと日本だけは自分たちのマーケットで間に合っているから、そういうことに興味がないのだろうと皮肉まじりに言われたことがあります。この作品は共同出版をどうしてもやりたくて、2,000でも3,000でもよいから、ということでやりました。そのときも、小峰書店がフィルム代を印刷所と掛け合って安くしてくださったりして、いろいろ協力してくださいました。その8か国はシンガポールで印刷しました。たまたま私が1970年まで勤めていたタイム社で知り合った凸版印刷の方がシンガポールに赴任していて、その方が非常にこまめに協力してくださり、8か国で出すことができました。

それでスペイン語が出て、その後イタリアとギリシャで、やはり小さい出版社でしたが出してくれて、中国では小峰紀雄さんと知り合いの出版社が直接の契約で出しました。延べ14か国で出ました。ですから私にとっては非常に印象に残る記念すべき絵本となりました。こちらの売りたいという気持ちも大事ですが、やはり一人一人会っていろいろ説明して理解してもらって、それから海外の編集者、印刷所、日本側の出版社からのいろいろな協力があって出来た14か国語だと思っております。(本当は13言語ですが、フランスのSyrosにいた編集者が南仏・アルルのアクト・シュド(Actes Sud)に移り、そこで再刊してくれたので、延べ14か国です。)

## 文化の違いのすり合わせ

『くまたくんのたんじょうび』(わたなべしげおさく、おおともやすおえ、あかね書房、1984年)という絵本があるのですが、これの翻訳で苦労というか、文化の違いのすり合わせという経験をいたしました。日本語では、おばあさんぐまがくまたくんを抱っこしてお風呂に入れる場面がありますが、それをおじいさんに変えてしまっているのです。「どうしてなのですか」と聞いたら「だって男の子を入れるのだから、男の人が入れるのは当然でしょ」というようなことを言うのです。画家にしたらおじいさんぐまとおばあさんぐまを描き分けているのですから、それは駄目だということで、おばあさんに戻してもらいました。

その次は、1キロのお餅を誕生1年目に担ぐという場面です。特に作家のわたなべしげおさんの出身地の静岡の方では今でも行われている風習らしいのですが、私も初めて知りました。これを見て動物虐待だと言うのですよ。そのお餅の説明を注か何かで書いても興ざめになりますから、仕方なく、結局、枕を「どっこいしょ」と担いだことにしました。

それから一番問題だったのは、レストランの前で記念撮影をしている場面です。アメリカの編集者が、レストランに行くことが写真撮影をするような記念日にはならないと言うのです。それで、動物園の帰りだと書いてあるのです。でも、わたなべしげおさんにお話ししたら「そんな、動物園のくまをくまが見に行くなんて、ブラックユーモアにもほどがある」と怒られました。じゃあ日米とも野球はポピュラーだから野球見物にしましょと

言うのですが、1歳の子どもが野球を見て喜ぶかといったら、それも疑問で、何かないかということで、結局アメリカ人の大好きなパレードを見た帰りにレストランに行き記念撮影をしたということに変えてもらいました。

みんな自分の国の本にしてしまいたいのですよね。ですから、私たちは単に物を売っているのではなくて、日本の文化を知ってもらうためにもそのとおりに訳してほしいのだ、ということをお伝えなくてはならないと思います。

## 平和をテーマに企画

『まるいちきゅうのまるいちにち』(エリック・カール [ほか] 作、安野光雅編、童話屋、1986年) の話をしたいと思います。安野さんが時々ヨーロッパの方に取材にいらっやっやって、時間が余ったから一緒に来ないかとお声をかけていただいて、光栄なことに横に乗せていただき、方々回ったことがあります。そういうときには、最近読んだ本の話とか知っている小話とか、そういう話をするのですが、『滄海よ眠れ』(沢地久枝著、毎日新聞社、1984年) を安野さんが最近読んだというお話をなさいました。確かその表紙を安野さんが引き受けられていたと思います。ミッドウェーで船が沈んでいるときに、その海兵隊の兄弟が自分の国のアメリカでは全く別のことをして、こちらは眠るときだけでも向こうは朝日を見ていた。ちょっと詳しいことを忘れてしまったのですが、世界の子どもたちが平和ということをお考えするとき、そういうふうには朝日と夕日を見て違っているけれども実は同じ地球という星の上で生活をしている、ということをお表現するような絵本を作りたい

とおっしゃったのです。

けれども、片方は夕日で片方は朝日というような同じような画面になってしまうと国が違っても面白くない、ということで結局たどり着いたのが、南半球、北半球に分けて八つの国の子どもをグリニッジタイム、標準時 1月1日の0時を基準にして書いてもらおうという話になりました。当時はソ連には鉄のカーテンがありましたし、中国は竹のカーテンがありましたし、非常に悪い時代でした。それで中国とソ連は是非入れたいということと、日本も入れたいということで、結局、上は4か国北半球、下が4か国南半球ということにいかなくて、南半球の方はブラジルとオーストラリアになってしまいました。

作家は、ボローニャで知り合った名のある画家たちで私が交渉しやすい方から選びました。例えばアメリカは、「Moe」の前身の「絵本とおはなし」という雑誌を当時偕成社が出していましたが、その依頼でエリック・カールさんにインタビューに行き泊めていただいたりして親しくなったので、そのエリック・カールさん。アフリカは、アフリカ出身ですがニューヨークに住んでいたディロンさん御夫妻を訪ねたことがあります。それからブラジルのジャン・カルビさんもボローニャで賞を取られてお目にかかっていました。お目にかかっていなかったのは、イギリスの『スノーマン』を書いたレイモンド・ブリッグズさんです。それからロシアと中国の画家も私は知りませんでした。ロシアと中国の画家は、ユネスコが募集しているコンテストに応募した方の中から安野さんがよいと思われた画家に、多分日本にいた板東さんを通して交渉していただいたと思います。ほかの方は全部手

紙か電話で私がお願いしました。

皆さん快く引き受けてくださったのですが、問題は印税をどうするかということでした。名のある画家たちをお願いしたら、印税を高く払わないといけないだろうし、かといって若い人たちでは出来るまでが不安であるということで、イギリスに行ったときに、ジュディ・テイラーさんというボードリー・ヘッドの編集長に相談したら「それはユニセフに寄付すると言えばよいのよ」ということで、その一言で皆さんに快諾していただきました。私たちが初めて企画料というのを印税でいただくことができた絵本になりました。

真ん中にスペースがあるのですが、そこだけが架空の国の話で、日付変更線辺りに住んでいるロビンソン・クルーソーのような生活をしている男の子が主人公になりました。そこは安野さんが描かれました。例えばその8か国に選ばれなかったフランスとかドイツとかオランダとかがその空間に絵を描いてくれたらよいというような気持ちがあったのですが、そこはうまくいきませんで、やはりアメリカとイギリスと日本と台湾で出ました。

3時間ずつの絵が8枚描いてあります。例えばアメリカやブラジルはまだ12月31日なのですが、それぞれにドラマのある絵を描いてくれましたので、とてもよい絵本になったと思います。アメリカではまだ図書館などでもたくさん売られています。確か香港で印刷しているのですが、日本でも随分版を重ねています。私たちが初めて安野さんの発案で企画、編集をさせていただいた思い出深い本になりました。

## 韓国の出版事情

先ほど韓国のお話をしましたが、最初に韓国から出版された子どもの本は、あかね書房から出た「科学のアルバム」シリーズです。当時はいわゆる自然科学に限らずいろいろなシリーズを出したいということでした。なぜかと言いますと、当時、訪問販売、特にテレフォンセールスが韓国ではやっていて、親が教育的なものにはお金を使う、ということでした。母親たちが単行本を自分の目で選ぶという目がまだ十分に出来ていなかったの、ひところの日本の後を追うような形で韓国は出版界に入ってきました。

権利を取らなくても済んだ時代に出していた本が「ノントン」のシリーズですが、いつのまにか猫がパンダに変わっていて、それはもうびっくりしました。猫は韓国では妖怪になるということで、日本のように好かれていないらしくて、嫌われているのでパンダに描き換えたというのです。難しい言葉で言うと、著作権には「著作者人格権」と「同一性保持権」というのがあり、両方侵しているのですね。そういうことで回収してもらいました。

今も権利はたくさん買っていて、何10万と売れている日本からの本があるのですが、やはりもう一つ契約の観念が薄いということがあります。例えば『かずの絵本』という五味太郎さんの大判の本で、日本の子どもたちの服装がいつの間にか韓国の正装になってしまっているのですね。それも事前に断ってくれたらよいのですが、出来てきたのを見て初めて知った、ということがありました。

それは大人の本にもありまして、例えば村上春樹さんの『ダンス・ダンス・ダンス』に佐々木マキさんのチャーミングな絵が描いて

あったのを、模倣ならばよいのだろうと思って、人の向きを変えて、洋服の色を変えただけというのがあって、もうびっくりしてしまいました。

1992年には中国が万国著作権条約に入って権利を取るようになりましたが、いまだに契約の観念が充分ではないところがあるので、私たちはそういう面でも目を光らせていなければなりません。

### ユニバーサルな幼児向け絵本

「空気ばかり売っていないで物を売れ」ということをしきりに応援団から言われました。というのは、『まるいちきゅうのまるいちにち』の場合はたまたま成功しましたが、やはりそこまでやらないとちゃんと経営していけないのではないかというアドバイスだったと思うのです。ですから考えて、ボードブックを作ることにしました。それは穴をテーマにした本で9冊セットになりました。五味太郎さんにお願ひし、最初3点作ってくださいました。私はボードブックというのは、数を数えましようとか、あいうえおを覚えましようとか、そういう本だというイメージがあり、今回は文字がなくてよいから、小さい子どもたちがお母さんと一緒にストーリーが作れるような楽しい絵本を作りたい、と五味さんにお願ひしました。

最初に出来たのは、ねずみ君が穴を歩いていくだけの話です。例えば、「とととと」とか「たったた」とか走る音だけでもよいと思ったのですが、編集者に聞きましたら、文字がないとお母さん方が有り難がらなくて買わない、と言うのです。ですから仕方なくて、文字を付けていただきました。でも、どの

国でも自分たちがよいようにテキストを作ってくださいと言ったら、アメリカではクロニクルブックス (Chronicle Books) というサンフランシスコにある出版社の編集者が、とてもよい英文を作ってくれました。スペイン語とかフランス語とかいろいろと出ました。スペイン語は、メキシコで出ました。なぜかメキシコでは大変受けまして、教育省がバックアップして、子どもに楽しく勉強させるために使いたいと、7万セットも買ってくれたのです。マリアッチのリズムでディスクまで作ってくれて、それで子どもたちが大変喜んだそうです。韓国でも出ましたし、またどんどん広がっていくのではないかと思います。全部穴をテーマにして、共同出版にしました。

ちょっと先ほど共同出版の話をしましたでしたが、シンガポールのティエン・ワー・プレス (Tien Wah Press) という印刷所にたどり着きました。私がケルンにいたということもあって、ユーゴスラビア、イタリア、スペイン、アイルランドで安くできるということで、随分回りました。スペインなどではオーダーが取れると思ったのか、国旗まで掲げて歓迎してくれましたが、やはり素人の私の目から見ても美術書の色がちょっとずれているとか、納期のこととか、いろいろな問題があり、たどり着いたのがシンガポールでした。納期も技術もちゃんとしている、製版の技術もある、そういうことで、ティエン・ワー・プレスにたどり着きました。

ワー家は華僑で財をなしたそうですが、お父さんが亡くなり、兄弟のうちお兄さんの方は余り興味がなくて末のヘンリーという人だけが残り、大日本印刷に吸収されました。ですが、その前に私がお付き合いをしていたも

のですから、日本の大日本印刷を通さず直接印刷所と掛け合って交渉でき、大変安くしてもらいました。

この穴を開けるといのがとても大変でした。子どもが手を突っ込んだときに手を切らないためにどうしたらよいか、それからボードブックの端っこを四角ではなくて丸くするにはどうしたらよいか、それができればノーベル賞ものだと当時言われたくらいです。ティエン・ワー・プレスで子どもが手を突っ込んでもけがしないように、シャープに穴を開ける機械をわざわざ開発してくれたりしました。印刷所の工場はシンガポールではなくてマレーシアにあります。人件費がシンガポールの75%だということです。

日本では偕成社から出たのですが、お見せしたら、当時の社長の今村広さんがその場で5万セットのオーダーを下さいました。私たちに対する応援だったと思うのですが、そういう具合にいろいろな方が一生懸命応援してくださったお陰で、このような面白い本ができました。五味太郎さんもその一人で、どうせ貧乏なのだろうと日本著作権輸出センター(JFC)のロゴまで作って下さいました。

## おわりに

私の仕事は、前から児童書を担当していた吉田ゆりかという者に2年前に任せ、社長職も譲り、私は、今は心穏やかな生活を静かに送っていますが、こうやって皆さんにお会いできるチャンスができてよかったと思います。また、ベッティナー・ヒューリマンさんという素晴らしい方にお会いし、その周辺の方たちとも仲よくなり、いろいろな人脈の

広がりもできたお陰で、面白い仕事が広がったと感謝しております。

最後にベッティナー・ヒューリマンさんの言葉を引用したいと思います。「同じ本を読んで育った子どもたちは、同じ理念を分かち合う。成長してお互いに戦うはずがない。本は平和と幸せのための大切な道具です」私たちも、平和の大切さを世界の子どもたちに伝えたい、そのことに手を貸したいと思っております。

ご清聴どうもありがとうございました。

(補足)

一つ言い忘れたことがありました。『ひろしまのピカ』の英語版のことです。アメリカ版はこちらが提供したテキストを基に編集長がちゃんと英語らしい英語に忠実に訳してくださったようなのですが、イギリスの場合は違いました。イギリスでは、こちらが提供したテキストを基にして、ジュディス・エイキン(Judith Eikin)さんという評論家として有名な方に文章を依頼したらしいのです。その方の弟さんがスチュアート・アトキンさんという、日本でお芝居をしている方で、それに関係を持っていた河出書房にいらした三村美智子さんが協力して日本語から英語にしたものをジュディス・エイキンさんにお見せして、”Story in English by Judith Eikin”となっています。表紙は丸木俊さんです。ですから、丸木さんは絵を描いただけだと思われかねませんよね。私どももエージェントとして、ちゃんと英語を見せてくださいとか表紙を見せてくださいとか言うべきじゃなかったかと、それがちょっと痛恨事なのです。